

開

●次の文章は、室生犀星「鉄の死」(昭和九年)の全文です。これを読んで、後の問いに答えなさい。答えは、すべて解答用紙のワクの中におさまるように書きなさい。

虎の子に似ていたブルドックの子どもは、鉄といい、てっちゃんと呼ばれていた。のそのそのぐさそうに歩いてうれしい時はいつも一声だけ吠えた。

鉄は、もう一頭いるゴリという土佐ブルと時々格闘をした。土佐ブルは鉄の二倍くらい大きさがあって、格闘することに耳のつけもとを食い破られ、そのため耳のつけもとの毛が生えないで、つるつるにばげていた。負けるくせに辛抱よく闘う鉄は、引き分けてやっても闘いを挑んでできなかった。

ゴリは純粋の闘犬であった。僕はゴリと鉄とが顔を合わさないように、ゴリは裏口に、鉄は表門につないでおくようにしていた。しかし、運動に連れ出す時に顔を合わすので、時にはお互いに知らん顔をしていることもあったが、両方の目が正面から見合うような時にその日の機嫌の具合で、目の光がち合ったなと思うともう、一つの塊になり、塊のなかから唸り声と、体と体ともみ合う動物的な重い音が続くのであった。鉄はいつも下敷きにされていたが、弱っても我慢よくさけび声をあげなかった。

それでいて仲のよい時は、二頭とも僕に連れられて運動に出た。鉄の方は鎖から放してゴリは綱で引いてゆくのだが、鉄はそんな時にわざと子供のようにあまえていた。大森谷中に住んだ四年の間、僕は毎日夕方と朝との一時間をどぶ川の土手伝いに、この犬たちと散歩しない日はなかった。どこの家の庭に万作の木があつて春になると咲くとか、どこの家の女の子は朝学校に出る時きまつて泣くとか、どこの家は女ばかり住んでいてそのなかで一番美しい女が主人であるとか、どこの家に筧(庭に水を引く風流なしかけ)があつて夏になると涼しい水音が滴るとか、どこの家に柚子の木や柿の実がなつてみごとであるとかいうことを、僕はいつのまにか覚えていた。どぶ川には川えびや鯉の子のようなものがいて、昔は大森谷中も大沼であつたことなど、僕の散歩に風景的な背景を考えさせていた。

僕は犬馬込の奥に小さい家を建てて、沼地の谷中の町から去年の春に引っ越して行った。鉄とゴリ、ほかに黒い猫が一匹、僕らの荷物といっしょに馬込の新しい家に連れて行ったが、猫は二日もたたない間に前の貸家に行き、①人気のない畳にさす春の陽のなかにうずくまっていた。何度連れて帰ってもやはり前の家をたずねて行き、食事新しい家ではしなかった。僕は庭をつくるために鉄やゴリの運動をさせることができなかったが、ある日鉄の姿が見えず、前の家に人をやってみると、その庭先のもとの彼の犬舎のあつたところに、②昔のユメでもさぐり当てるように温かくほかほかと眠っていた。

黒猫はひと月も帰つて来ない間に、鳶のような鋭い目の光をもち、のら猫のずるい逃げ足と疑い深い心をもつようになり、女房や女中が連れに行っても馴染みを逸れた素っ気ないふうをした。僕はそんな猫ならうちやっておけと言ったが、古い家や古い庭やくぐり慣れた垣根を慕う、執念深い畜生の心を悲しまざるをえなかった。食物も食わないまでに古い居慣れた家になじむ、そういう義理堅い変わらない心も何か僕に③応えるものがあつた。

ある生暖かい更けてから暴風雨に変わった晩が明けて、朝の食物をやるうとすると鉄もゴリも犬舎のなかにいなかった。ゴリは鎖の結び目から鎖を切つて行ったのだ。昨夜のはげしい雨のなかに出かけるからには、やはり前の家にちがいないと思い、行ってみると二頭とも縁の下に喧嘩もせずにくくぬくと眠

成 A2 国 語

開

つていて、茫々たる春夜を守りつづけていた。

しかし、二三ヶ月もたつと前の家に行くようなことがなくなったが、黒猫だけはとうとう帰らなかった。やせ衰えた皮と骨との体を支えて、依然、古い家のまわりをうろついていた。それは死を賭してもなお猫は猫の性格と伝説のなかをさまよわねばならないものを持っているらしかった。問三 猫をあわれむ女房や子供たちは、最後に視力も衰え果てた黒猫を連れに行ったが、名前を呼んでみても、不思議そうに女房や子供たちをながめるだけで、すぐそばに寄りつこうともしなかった。その目はやっとう古い飼主を見定めるくらいで、それも、うろ覚えに近い。うさんくさい目つきにすぎなかった。子供たちもしまいに、思い切ったが、女はそうは簡単にゆかなかった。しかし、黒猫の方で来ないのでどうにも呼びようもなかった。

鉄はつないでなかったので馬込の町をよくぶらぶら歩いていた。小学校への通路になっっている大通りで生徒たちはみんなこの「てっちゃん」を覚えていた。鉄はみんなから呼びならされていたが、それで行こうともしないでブルドック特有のゆったりとした、肥ったからだを運ぶような歩きようをしていた。それほど人には慣れている鉄は別種の犬と行き合うと、すぐ格闘を挑んで行き、いつも血だらけになり馬込街道のほりを立てていた。そういう時、生徒たちの一人がすぐ僕の家かけ込んで、僕を呼びに来るのであった。素人眼に恐ろしく見える格闘も僕には何でもなかった。僕は鉄を喧嘩から引き放し、彼の頭をなでながら、小言を言うのであった。問四 弱虫のくせに喧嘩ばかりしやがつて。骨を折らずじやねえか。鉄はそんな時、悲しそうに首を垂れて、謹慎（つつしみ）の意志を表していた。

そういう鉄ではあったが、ゴリには勝ち目がなかった。どうかすると一週間に一度くらい格闘をやり、そのたびに鉄の耳もとの例のはげのところが食い破られていた。これは何とかしなければなるまいと相談したが、なかなか獐犷な顔つきの土佐ブルのもらい手はなかった。二三人の人が来て一瞥する（ちらっと見る）と、こんな恐ろしい犬は困ると言って引き取ってくれなかった。そのうち、ある学校の教師で犬好きな人がいて、その人にくれてあげることにした。一、馬や牛を見ると飛びつくこと。二、九尺くらい（約三メートル）の石垣を飛び越えること。三、同類に食いついたら放さぬこと。そういう時は首を絞めて息を止めること。四、自動車に飛びつくこと。五、猫を見ると食い殺してしまうこと。だから、猫は一切近づけぬこと。そういう細々とした注意書きをして僕は四年間朝夕とともに散歩をしたゴリに別れた。一つは鉄がいつもひどい目に会うので子供や女たちから、それではかわいそうだからという抗議が原因していたが、別の意味でこの大型の犬の運動は僕には重荷でもあった。手入れをするだけでも二頭で一時間はかかった。

鉄はひとりになるとさびしそうだった。犬はときどき格闘をさせないと人間に食いつくようになると言われているほどだから、どこかたくましさやぬけ落ち、気ぬけのしたようなところが、④ヘイゼイの鉄のものの憂い調子の間に現れた。そのはずだった。四年の間に月に三度あて格闘していた相手がいなくなったのであるから、生活的には張りがなくなったも同様であった。彼はボンヤリと寝てばかりいて、何も面白いことがなさそうであった。僕が彼を呼んでみて、どうだい兄弟、やはり食いつかれていた方がよいか、とつぶやきながら、例のはげのところをなでてやると、鉄は悲しそうに首をさしのべていた。はげは、四年間の間に無数の傷あとを残し、完全に毛が生えていなかった。ある時は化膿し、ある時は手術して手当てをした傷だった。しかし、多少ひどい目に会っても鉄は友だちが欲しいらしかった。僕

開

にその気持ちが変わらないではなかった。

ある暑い六月の末に、鉄は朝からだるそうに寝てばかりいて、呼んでもすぐには起きなかった。みんなは鉄が少し変だと言っていたが食事は一切しないで、涼しい木陰で荒い息づかいをし、胸がまるで風船玉のようにふくれたり縮んだりした。これは食あたりかもしれないと思い、食物を調べたが中毒するようなものではなかった。犬猫病院のお医者に見せると、これは心臓なんかめっちゃくちゃだと言い、ブドウ糖とカンフルとを注射した。多分、猛烈な中毒症状であろうということであつた。命は取り止めることができるかどうかと言うと、医者は多分だめでしようと言った。これまでたびたび鉄ちゃんを診たが今度ほど重態なことがないと、たびたび手にかけて医者が言った。

——まあ、あきらめてもらいましょうか。

僕は体温を⑤ハカつてみたが、七度七分くらいしかなかった。夜中になるとそういう重い病気のくせに、通りに出て、通りから入った大工の普請小屋の鉋くずのなかに寝ていた。

——死に場所をえらんでいるのか。

その翌晩も出て行つたが、もう歩く元気がなく家の横手の草原のなかに寝ていた。鉄は広い人気のないところに行つて勝手に寝ていたらしく、人間がうるさそうな気配をして見せた。それは分かりすぎるほど僕に分かつている気持ちだったから、僕らはただながめているだけで、言葉を出さないうでいた。四日目に医者は多分今晩くらいでしようと言った。口のなかに黄疽の症状が現れ、心臓は依然めちゃくちゃだった。これは心臓に虫が蟻集している、犬には恐ろしい病気かも知れない。中毒ではないかも知れぬ、その証拠には体温が上がりなかった。

翌朝、僕は五時に起き勝手（台所）に行つたが、ゆきが戸を外しながら泣いていた。鉄はまだやわらかい温かいまま死んでいた。子供たちは前の晩に鉄が死んだら死骸を見せてくれるなど、僕にたのんでいた。だから、僕は木箱のなかに入れて風呂敷きに包み、いつでも寺に持つて行けるようにしておいた。気がつくと思骸からはい出したダニが一ぴき、朝の涼しい土の上を歩いていた。僕はそれを静かに見ていると鉄の死んだことを、どういうふうに家の者に話そうかと考えた。

ゆきは木箱に入れてしまつてからも、まだ泣いていた。僕は四年前の春寒いころに松屋（デパートの名前）の屋上で支払った二十円の金を思い出し、その虎の子に似たブルドックの子どもを自転車につけて、僕の家に届けてくれた配達夫の顔を思い出した。それから二日目にデイステンパー（命取りになりかねない、幼犬特有の病気）にかかり入院させた時に、例のお医者さんが今度と同じような言葉で、まああきらめてもらいましょうかと言つたことを頭にうかべた。問六 あの時も今度も同じことを言つたじゃないか、と僕は自問してみた。デイステンパーが治つてから毎晩、鉄は湯たんぽを犬舎のなかに入れてもらい、湯たんぽに抱きついて寝ていた。そのころいた女中が縁側でその湯たんぽを入れながら言う声が、僕の耳にまだ記憶を残していた。

——お温かにしましたからお休みなさいな。

家の者がみんな起きて出て、鉄の死んだことを知つたが、子供たちは別に何とも言わずに行つた。出がけに、早くお葬いをしてやつておいてちょうだいと言つた。見ることも聞くこともいやであるらしいかつた。

開 問一

- (1)——部①～⑤の、①「人気」、③「細々」の読みをひらがなで記し、②「ユメ」、④「ヘイゼイ」、⑤「ハカ」を漢字に直しなさい。

(2)——部①～⑤の、本文中における意味としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

㊦「応える」

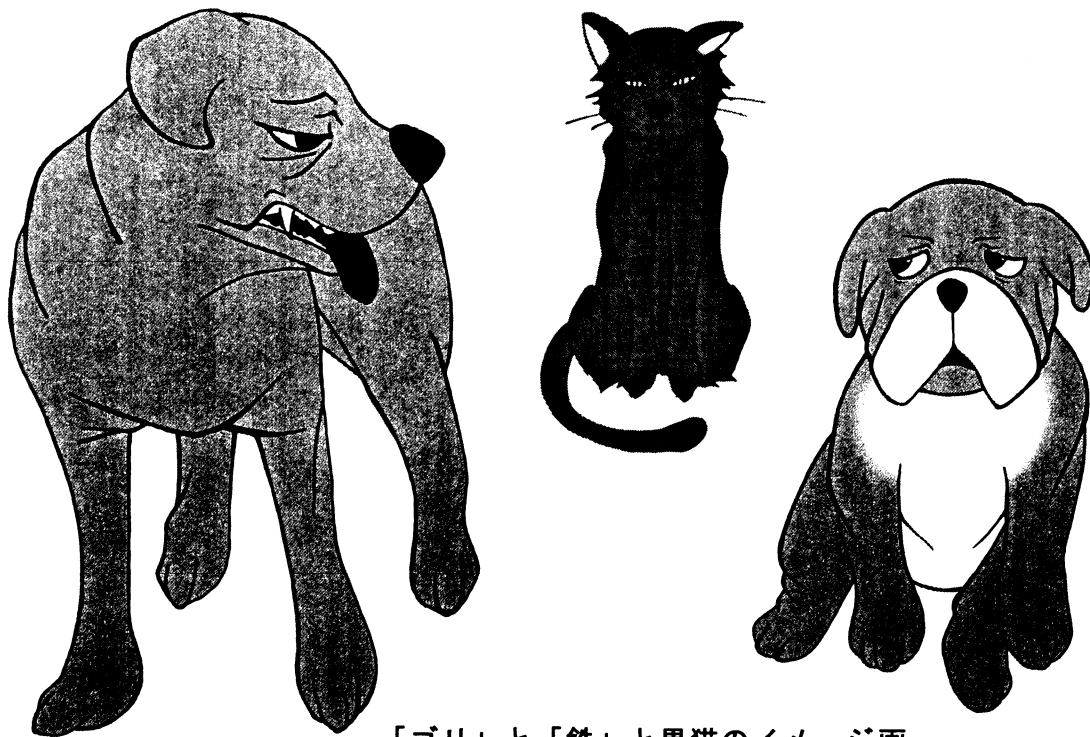
ア いらだちを起こさせる
イ うつとうしくやつかない
ウ 重くひびいてやりきれない
エ こらえきれなくて腹立たしい
オ どこか期待していたとおりの

㊧「うさんくさい」

ア 死んだ魚の目のような
イ 野生的な陰しさのある
ウ 人をこばみ遠ざけるような
エ あやしいものを見るような
オ 飼い主を忘れてしまったような

㊨「思い切った」

ア 無理やり連れ帰ろうとした
イ 呼び寄せるのをあきらめた
ウ 大声で力の限り呼びかけた
エ あわれむ気持ちもうすれた
オ さがし出す気力がなくなった



「ゴリ」と「鉄」と黒猫のイメージ画

問二 筆者（「僕」）は、初めに「鉄」をどのような犬として描いていますか。本文中の大森馬込に引

越すまでの部分に書かれていることばを用いて、わかりやすくまとめなさい。

問三 ——部「猫をあわれむ女房や子供たち」とありますが、この黒猫のどのようなところをあわれ

んでいると筆者は考えていますか。本文中に書かれていることばをもとにして、できるだけ自分のことばでわかりやすく説明しなさい。

問四 ——部「弱虫のくせに喧嘩ばかりしやがつて。骨を折らすじゃねえか。」とありますが、このこ

とばから筆者のどのような気持ちを読み取れますか。本文中に書かれていることばをもとにして、できるだけ自分のことばでわかりやすく説明しなさい。

成
A5
国
語

開

問五 土佐ブルの「ゴリ」は、「鉄」にとつてどのような相手であつたと筆者は考えていますか。できるだけ自分のことばでわかりやすく説明しなさい。

問六

——部「あの時も今度も同じことを言ったじやないか、と僕は自問してみた。」とありますが、ここから筆者のどのような気持ちが読み取れますか。「自問してみた」とあることに注意して、できるだけ自分のことばでわかりやすく説明しなさい。

●下書き用紙です。提出する必要はありません。

[illegible]